

3 採卵鶏における粘膜型鶏痘発症事例

茨城県県北家畜保健衛生所

○矢口裕司

約 55,000 羽の採卵鶏を飼養する養鶏場の大雛舎（約 16,000 羽飼養）で、2013 年 10 月中旬より、死亡羽数が 0.27% から 1.6% に増加したため病性鑑定を実施した。鶏舎内では、食欲低下、開口呼吸及び眼瞼浮腫がみられた。本農場は初生導入しており、この鶏群では初生で鶏痘ワクチンを接種していた。病性鑑定は発症及び死亡した 5 羽について実施した。剖検所見では、鼻腔内に膿汁が貯留し喉頭内腔は黄白色の付着物により閉塞していた。細菌検査では、有意菌は分離されなかった。ウイルス検査では、気管及びクロアカスワブについてインフルエンザウイルス簡易検査を実施したが、陰性であった。また、同材料について発育鶏卵尿膜腔内接種法を実施したが、赤血球凝集性を有するウイルスは分離されなかった。病理組織検査では、喉頭の粘膜上皮細胞は好酸性細胞質内封入体（ポリンゲル小体）を伴う風船様膨化及び過形成が著しく、喉頭腔は閉塞していた。透過型顕微鏡による検索では、封入体はウイルス成熟粒子と顆粒状の脂質で構成されていた。以上の病理組織検査の結果から、粘膜型鶏痘と診断した。

粘膜型鶏痘では、口腔、鼻腔、喉頭及び気管の粘膜が侵されるため、呼吸器症状を呈するが、今回のように粘膜上皮細胞が著しく過形成を呈した場合には窒息死を引き起こすため、死亡羽数が多くなる傾向があり注意が必要である。当該農場では 60 日齢で 2 回目のワクチンを接種する予定であったが、ワクチン接種前に鶏痘が発生した。その後は、2 回目のワクチン接種を 50 日齢に変更したところ、発生は終息した。